荒木の銭太鼓

福井市荒木町　伝承芸能

荒木銭太鼓研究会

目　次

はじめに
第一章　荒木の紹介
第二章　銭太鼓
第三章　「荒木銭太鼓」の始まり
第四章　初めのころの社会情勢
第五章　大戦後の銭太鼓
第六章　うらがまちづくり
　　奈良県　明日香村との交流
第七章　福井市より表彰
第八章　荒木銭太鼓の経歴
第九章　現状維持と今後の課題
第十章　銭太鼓出演者の思い出
第十一章　練習風景・出演風景
第十二章　その他の資料

はじめに

私たち荒木長寿クラブの会合では、雑談に入ると何時しか、若かりし頃の思いで話になって花が咲きます。それは長寿クラブの人たちの最も楽しいひと時であり年を忘れて生き生きとした和やかな雰囲気を作り出してくれます。

この語り合いは、荒木の歴史の記録になっています。今語り合っている内容は、単なる思い出であっても、これからの人たちには貴重な歴史資料となり、内容を理解してもらえるならば、これからの荒木、福井、日本、世界の構築に大いに役立つことと思って、此処に記録として残そうと考えました。

荒木町の過去を眺めてみるとき、語り継がれねば、と思うことがたくさんあります。

そのいくつかを此処に並べてみますと、「盤持石（力石）」「お寄り」「天満神社」「荒木遺跡」「結い」「荒木集落の分村問題」「荒木集落センター」等々語り継ぐ、あるいは記録に留めておきたいことが多いことに驚かされる。此処ではそのうちの一つ「銭太鼓」について今までの経験者の話や写真等の資料収集を始め、福井市教育委員会の平成二十三度「福井学」推進協力団体の指定を受け研究を進め、これを冊子にまとめました。

第一章　荒木の紹介

伝承芸能を語るとき、その地区の環境と歴史を知ることが、話を理解する上で大いに役立ちます。

福井市荒木町は慶長十一年（一千六百七年）頃の越前国絵図に見ることが出来ます。明治時代には越前国荒木村から福井県足羽郡酒生村荒木、その後一時吉田郡岡保村荒木、また足羽郡酒生村荒木、足羽郡足羽村荒木、足羽郡足羽町荒木、そして現在の福井市荒木町となって現在に至っております。また弥生時代の遺跡も発掘されてその土器は県立博物館、福井市歴史博物館、福井市埋蔵文化センターに保管されております。また福井市曾万布遺跡からは木簡がでておりそこに「あらきの・・・」と記されております。

福井市荒木町は、昔足羽郡の北の端で吉田郡岡保村と接しており、南に足羽川、東に吉野岳を望む純農村で貧富の差は小さく、戸数は昔から六十戸で増減はほとんどありません。

昔から荒木に嫁に来て勤まらない嫁はどこに行っても勤まらないと云われていました。近くには仕事が大変な村があり「ある村へ嫁に行こうか、鉈（なた）で頭を剃ろうか」と云われたところもあります。

荒木町には、昔からの盆踊りが今日まで続いており足羽郡誌にも載っているほど有名、近在近郷の若い善男善女の娯楽の集いの場でもありました。

第二章　銭太鼓

日本民族楽器の一種で、形状は竹筒の中に穴の開いた一文銭を入れ、ひもでくくり竹と銭の擦れ合う音で太鼓に替わる音を出します。この楽器は出雲地方の民族的名物として唄や踊りの伴奏に用いられたものでその歴史はかなり古い時代からのものと聴いています。

出雲地方の安来節の伴奏として古くから銭太鼓が用いられ明治にはいってからも時折見られ明治の末期、安来節の正調伴奏が三味線と鼓に限定されたため以来正式な安来節の場所では用いられなかったのです。　銭太鼓が目出度い座敷などで安来節の余技として、盛んになったのは戦後の開放ムードにより市民の要望が増してきたからです。この地方独特の野趣に満ちた手振り調子は、どじょうすくいや唐傘踊りとともに人気の的となり安来節とは切っても切れない関係ができてきました。

現在では、銭太鼓は各地に広まりつつあるようです。

第　三　章　荒木の銭太鼓の始まり

昭和三年、昭和天皇即位の御大典のとき酒生村（現福井市）で山車（やま）を出したり踊りや田舎芝居を催して各集落を廻っていました。

当時、荒木（現福井市荒木町）に宮崎さんという旅芸人が居り、はじめ五十嵐　保(現　五十嵐　貢)さんの家で世話になりその後道端氏の小屋（現お寺の小屋）に一人で住んで居ました。彼は若い頃、踊りや田舎芝居の旅芸人として各地を廻っていましたが、幸い御大典の頃には荒木に戻って居りましたので、荒木の婦人会や青年団を中心に田舎芸の指導をしました。なお宮崎さんは銭太鼓のほか、唄や、どじょうすくい、唐傘おどりも指導したとのことです。

初期の人たちは、締め太鼓（太鼓の一種で胴の両端の革を紐などで締めて調子を整える太鼓の総称）は佐藤　敏氏、強力善太郎氏、唐傘踊りは松島　渡氏、唄は磯野ひささん、そのほか平田小弥太氏、五十嵐　保氏などの名が伝えられており、この人たちが受継いで後継者を育てていきました。それが次の世代、その次の世代へと受継がれ現在に至っております。

最初の唄は安来節の歌詞の「出雲」を「荒木」に替えて

私の生まれは　荒木の生まれ
どうぞ御ひいきに　　願います
荒木の名物　　荷物にぁならぬ
聴いてお帰り　　荒木節
アラ　エッサッサー

注　この記録は平成二十年八月　磯野寿美子さんの話より記載

なお祝儀や祝いの席で、俄（にわか）(俄狂言の略。素人が座敷、街頭で行なった即興の滑稽寸劇）では、めでたい家の屋号やその家の姓を、安來節の「出雲」を入れ替えて祝いの席に、俄自慢の客人が次々と笑いと華を添えました。現在流に云えば、宴会の席に「カラオケ」とでもいったほうがわかりやすいと思います。

第四章　荒木銭太鼓の始まりの頃

昭和年代の初めの頃、日本は満州に勢力を伸ばして国民の意気があがっていたころでありましたが、社会的には失業者が多くなったり、米価が暴落したり社会的には余り安定した時代ではありませんでした。農業社会も不況の中、自分たちでこの不況を乗り越える青年団や婦人会の人たちは唄や芝居に娯楽を求めたのです。

大人の男性は軍隊に召集され、農作物の増産に勤めなければならない時代でありました。したがって婦人たちも、農業の担い手として重労働に従事しなければ、ならなかったのです。

しかし酒生地区には、春の農作業、田植えが一段落した頃、半夏生（七十二候の夏至から十一日目に当たる日。太陽暦では七月二日頃。梅雨が明け田植えの終期とされる）の日に老人の敬老と農業者の慰労をかねて、小学生や各地区の婦人会、青年会が歌、唄、踊り、田舎芝居等を小学校のステージで開催されました。

しかし時代が進むにつれて日本は「欲しがりません勝までは」「撃ちてし止まん」、「食糧増産」を合言葉に、海外進出、支那事変、満州事変そして昭和十六年十二月八日日本がアメリカ　ハワイの真珠湾を攻撃し大東亜戦争（世界第二次戦争）へと流れていきました。

注　破線（　　）世界第二次戦争によく使われた標語であるが現在では「死語」に近い。

はじめは勢いがよかったのですが昭和十九年頃には米軍の空襲に備えるため、家、蔵等の白壁は黒に塗り替え、夜は、光が漏れると米軍の飛行機による空襲の的になるといわれ、灯火管制で裸電球の周りを黒い布で覆い光が家の外に漏れないようにしなければなりません。したがって夜、電灯の下で練習することができなかったのです。また戦時中、娯楽や芝居等は国賊（国の方針に従わない者）のすることと

して禁止されました。

その後、戦局は次第に悪化の一途をたどっていき、日本では食料や衣類、それに空襲で家を焼かれ、バラック（粗造の仮小屋）住まいなど物質的にも精神的にも娯楽を求める雰囲気ではありませんでした。昭和二十年七月十九日に福井空襲、八月には敗戦を迎えねばなりませんでした。

第五章　戦後の銭太鼓

昭和二十年七月、米軍による福井空襲で市内は焼け野原と化しました。そして八月十五日天皇陛下の玉音放送によって、敗戦の宣言を受けた。これを敗戦とは言わず終戦という言葉で国民の気持ちを紛らわせました。

この精神的、経済的に殺伐とした社会から立ち上がるべき強い意欲と強い町内の仲間、共同意識が、銭太鼓の復活へとつながっていったのです。

社会情勢が不安定なときに、銭太鼓が荒木に育ったことの意義には、目をみはるものがあります。当時の農作業の状態を無視しては理解できない。終戦を迎えたとはいえ、戦地からの引揚げは、思うように進まず、まだ農作業の殆どは女性と家畜のみであり、すべて手作業とつらい重労働でありました。田植えは、「結い」というしきたりでお互いに協力し合い共同作業によって行なわれました。朝の五時頃から午後の六時ごろまで日の出前から日が暮れるまでの重労働でした。それでも娯楽を求め、夕食の後片付け、子どもを寝かせたあと、疲れた体に鞭うって銭太鼓の練習場であるお寺（称仏寺）へ、遅いときには十二時頃になったこともあったそうです。しかし農村の朝は早かったので当時の婦人のみんなも大変であったと同時に、見逃せないのが、夫、姑をはじめ、家族全体の陰の協力があったからです。今にして思えば物が無く貧しい生活であった当時だが心は豊かな時でもありました。終戦後やっと精神的にも、物質的にもゆとりの光が射しかけて明るい希望がわいてきたとき、昭和二十三年六月二十八日午後五時頃、（当時はサマータイムといって、一時間時刻を早めること、したがって現在の時刻では午後四時頃）福井大震災が起こりました。この日は当日朝から大変蒸し暑くどんよりと曇っていました。

酒生小学校では生徒たちが学習発表会（敬老会も兼ねていました）の練習の最中でありました。この年は、地震で体育館は使用不能となり、残念ながら中止とり銭太鼓の出演もできませんでした。

このように空襲、敗戦、地震と大変苦しい時代、すさんだ時代に銭太鼓が大きな心の支えを果たしてくれたのです。

注　平成二十一年七月二十一日　午後　福井新聞社記者と自治会長（宮本　亘）をはじめ吉村美津子、乗竹信子、宮浦みさを、平田喜美恵、清水那珂子、林　主計達の話し合いの内容を元にしました。

第六章　うらがまちづくり
奈良　明日香村との交流

この精神的、経済的にも殺伐たる社会から立ち上がるべき強い意欲と強い町内の仲間、共同意識が、銭太鼓の復活へとつながっていったのです。

戦後の荒廃した社会からようやく復興のきっかけを掴んだのが、昭和二十七年、「福井復興博覧会」でした。この頃から酒生地区の敬老会が復活し銭太鼓の人気が徐々に元気を取り戻したと同時に寸劇等も行なわれ、時には福井市の木田小学校まで出かけたこともありました。その後荒木の婦人会は世代交代をしながら、継続し一年または数年おきの上演が続き今日に至っております。

福井市が「うらがまちづくり」を提唱して各地区の特色を生かした活動や催しによって活性化を図りました。酒生地区の「遺跡」の再認識と各集落でその地区の言い伝えや伝説を寸劇し、それを上演し、酒生寸劇集を出版しました。「うらがまちづくり」第一期の終わりに、福井と県外の地区との全国交流を図ることになり当地区では、北陸最大といわれている古墳群の遺跡を再認識するため奈良県明日香村との交流することになり、そこで酒生地区では荒木町の「銭太鼓」を披露することになりました。これまで、銭太鼓の衣装は印半纏（しるしばんてん）（背中に屋号を染め抜いたハッピ・法被）手拭（豆絞り）、前掛け等出演者が各自で家にあるものを利用して来ましたが、印半纏は日常使われることが無くなってきました。またその法被もだんだんなくなってきました。

また荒木の銭太鼓も使い古して相当傷んできたのでこれを機会に、荒木町の自治会で新しく購入してもらいました。そして平成一五年（二〇〇四年）十月九、十日、酒生地区文化祭のとき、明日香村から劇団「時空」と「二弦琴」「八雲琴」の一行を迎えて、上演、演奏を鑑賞した。このとき酒生地区伝統の「荒木の銭太鼓」を上演し好評を得た。

翌年、奈良明日香村へ酒生地区「うらがまちづくり」の一行が訪れたとき、明日香村の二弦琴保存会の皆様から、「銭太鼓の響きが今もなお耳に残っている」。明日香村の「二弦琴」演奏者から今後とも続けていくよう励まされました。明日香村の伝統芸能は、日本中に知られていることで有名です。しかし伝承芸能を維持継続していくには若者の支えが必要でなかなか容易ではないとのことです。

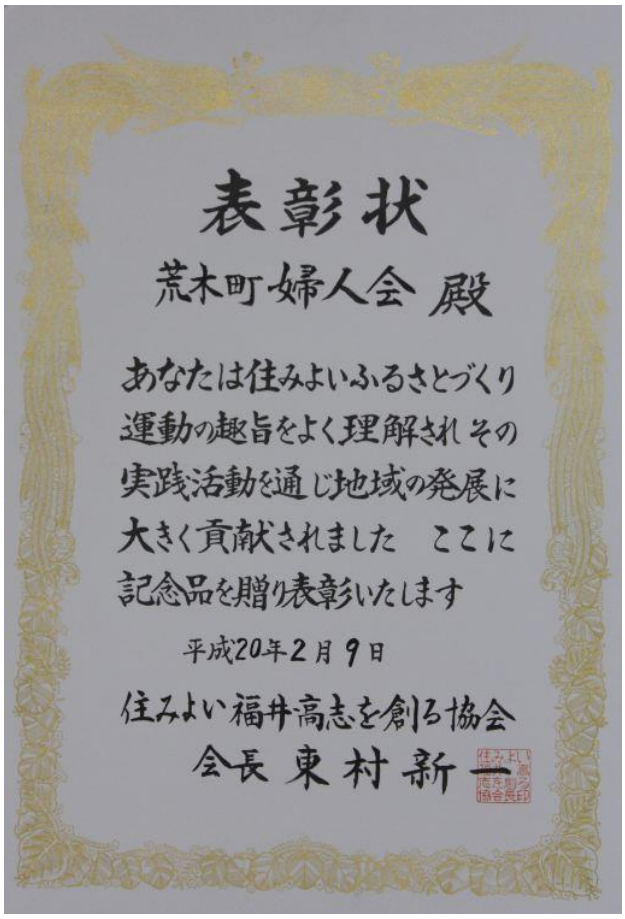
人は創造、新しいことをすることに情熱を燃やしますが、今あるものを生かすことも大変重要だと思います。一つのことを創造する

のには、大変なエネルギーと協力がなければ出来るものではありません。

さらにそれを継承して行く事は創造と同じかそれ以上の協力やエネルギーが必要です。

第七章　福井市より表彰

平成二十年二月九日　主催　住みよい福井・高志を創る協会共催（社）あすの福井県を創る協会の「平成十九年度福井・高志地区ふるさとづくり大会」が福井パレスホテルで開催され市町県民運動優良実践者とし団体表彰を受けました。



表彰状

荒木町婦人会 殿

あなたは住みよいふるさとづくり運動の趣旨をよく理解されその実践活動を通じ地域の発展に大きく貢献されました　ここに記念品を贈り表彰いたします

平成20年2月9日

住みよい福井高志を創る協会

会長 東村新一

次にその団体名と活動内容を原文のまま記載します。

団体名　　荒木婦人会　（女性三十三名）

活動内容

毎週土曜日の夜、荒木町集落センターにて、昔から荒木町に伝わる伝統芸能である「銭太鼓」の練習を行い、地区の祭りや文化祭の席上にて披露している。特に姑から嫁への継承がなされ、世代間の交流を図るとともに、伝統芸能の存続に熱心に取り組んでいる姿は、地区の子どもたちにとって模範となる。

昭和五十四年十一月　第二回　高志農協婦人部大会
昭和六十年十月一日　荒木町民体育大会　アトラクション
平成元年・四年　敬老会
平成五年・平成七年・平成九年・平成十一年
平成十五年十月十日　「すみたくなるまちづくり」全国大会
奈良県　明日香村との交流大会　酒生小学校
平成十六年十二月四日　市民憲章四十周年記念大会
平成十九年　生き生き文化祭（酒生地区）酒生小学校
平成二十年二月九日　平成十九年度
「ふるさとつくり大会」において受賞
平成二十一年八月二十六日付け福井新聞に紹介
その他　日付不詳であるが酒生地区敬老会
では数年おきに繰り返し披露

第八章　荒木銭太鼓の経歴

昭和三年十一月十日　御大典記念　酒生小学校
戦後記録に残っている記録より　付不詳　木田小学校
昭和四十九年二月十六日　福井県民会館大ホール
勤労青少年フェスティバル
昭和四十九年十一月　足羽町連合青年団主催の文化祭
文殊小学校

第九章　今後の課題

荒木には伝統行事として主なものに「銭太鼓」のほか、「お寄り」があります。「お寄り」はいつの頃からか定かでないが足羽郡誌にも古い記録として載せられています。近郊の集落では戦後一時復活したが今は、ほとんど無くなっていますが、幸い荒木では毎年「八月二十日と決めており今日もなお継続されています。お寄りは昔お寺のお盆

行事としておこなわれていましたが、その後近年ではお寺の行事としてよりも盆踊り、民踊大会等村の伝統行事として受継がれています。近年では、午後から夜のお寄りまでの間に子ども会の催しと余興的なものを披露している。太鼓、神楽、手品その他をしているが、その中で、近郷の人や荒木の皆さんの要望があると銭太鼓を披露してきました。

しかしこれらの行事を継続していくことには、多くの問題が山積しています。

行事を維持していくには、町民の意識と継続していく意欲、リーダー、人、そして維持費等々が考えられる。一番の問題点は継続意識と協力体制です。青年団、婦人会活動が近頃は、だんだん活気が乏しくなってきています。生活のすべてが経済がらみになっており、このような無形文化の意義が理解されにくくなってきています。またそうでなくても社会情勢、家庭状況からやむをえず協力できない人も多くなっています。

難しく考えることなく、伝統を守っていくことは、社会への潤滑油として大切なことではないでしょうか。

今後とも苦難を乗り越えて、伝統行事の継続に協力し、力を貸して頂き、心豊な町内、住みよい町内がいつまで継承されることを願っている。年寄りのたわごとと一蹴しないで欲しい。

第十章　銭太鼓出演者の思い出

荒木町　銭太鼓四代　荒木町　清水那珂子

お彼岸の日の夕暮れとき、近所のふるさとを愛する方より、銭太鼓のことを思い出して書いて欲しいと依頼され、文章など書いたことのない身で困り果てていると、「アラ、エッサッサー」と、太く逞しい母（前坊守）の声がどこか遠くから聞こえてきました。「昔から半夏至生の時には、磯野アラヤのオバサンが唄って、坂口のオバサンが縛り太鼓で、酒生の半夏至生は荒木の銭太鼓が大トリを勤めて終わったもんや。忘れられないうちに、こまどり会（姑さんが居り、自分も家に居る嫁さんの会）のみんなで引き継いでや」と、言われ、歌い手の母、踊り手は母屋の磯野さん、銭太鼓は松島さん等二代目のおばちゃんを講師に、私たちは夕食を片づけ、子供を寝かせて、夜の八時頃より寺の本堂で練習を始めました。

初めて銭太鼓を持った時は、好奇心からくる嬉しさと、一抹の不安な気持ちが入り混じって、それでもみな、本番までは懸命に練習を重ねました。

予行練習の日、太鼓の人は、法被姿に豆しぼりの手ぬぐいで、きりりと鉢巻を締め、しぼりの帯のタスキがけ。踊り手は絣の着物に赤いタスキとブルーの前掛け。それぞれみな、てんでんに家

の物を持ち寄り用意したものです。

いよいよ当日、母の口上で幕開け。お姑さんより伝授の坂口さんの締太鼓が、ドド、ドンと打ち鳴らされ、安來節の歌が入ると、いよいよ銭太鼓がシャンシャンとリズムよく響き渡り、会場は最高潮。途中、太鼓は全リズムで後方へ下がり、踊り手が前進して、カゴを手に軽快に動く。次に又銭太鼓の五人が前にいざりでて銭太鼓を〆の型にし、余韻を残して最後を締めます．最中に銭太鼓がするりと落ちて、あわてて拾って続けたことも、今となってはなつかしく楽しい経験でした。

後日、農協の方から「家に光」大会への場を依頼され、このときはみな一人前の芸人気分で、大ホールの舞台でしたが、皆一段と上手に揃って終わることができました。

荒木町銭太鼓三代目をつとめた私達のメンバーは、今ではもう孫の数を教えあうおばあさんとなり、今はもう四代目の人達がTシャツ姿で荒木の銭太鼓を引き継いで守っています。

銭　太　鼓　と　私

荒木町　　宮浦幸子

山や川に囲まれ、自然豊かな酒生地区の荒木町に嫁いで三十五年。この自治会には、銭太鼓という伝統芸能がある。

昭和三年の御大典（天皇即位）の時に旅芸人から教わったというから、もう八十年以上に亘って受け継がれてきていることになる。一度は途絶えた銭太鼓を婦人会が中心になり継承してきたという。私も、婦人会に入会してから約二十年間、銭太鼓に携わってきた。安来節の踊りに始まり、竹筒を操る銭太鼓に移りその後、囃子太鼓といろいろ経験させてもらった。地区の敬老会に出演する為集落センターに集まり、わきあいあいと練習に励む姿は、地域の人とのコミュニケーションや絆を深める源であったと思う。

地区内の年長者から若い世代へ、古き文化がしっかりと守られていく伝承のすばらしさをこれからも大切にしていきたいと思う。

銭太鼓への思い

荒木町　　宮浦知恵子

まだ若かりし頃「銭太鼓」に参加してと頼まれ、荒木町の伝統とも知らず、誘われるままの参加でした。最初は絣（かすり）の着物に手拭の姉さん被り姿で踊りました。踊りの苦手な私には、踊りの後ろでカシャ〳〵とリズミカルに打っている銭太鼓に憧れていました。

何年か後に、その私にも銭太鼓の順番がやってきました。初めて触れる銭太鼓の感触・・・思っていたように打つことはできませんでした。

七月に行なわれる地区の敬老会に参加する目的で、四月ごろから練習を始めました。夜、家事が終わると早速集落センターに行き練習の

繰り返しでした。

でも「音が合わない」「からだが後ろに反っていない」「廻し方が足りない」等々先輩からの厳しい指導もあり、家にいて家事がおわると子供と一緒に練習をしたこともありました。

そして、酒生小学校のステージでの初舞台・・・・ドキドキ・ドキドキ・・・緊張して手がうまく動かなかったのを今も覚えています。でも、あの感動は何時までも忘れることは出来ないでしょう・

最初は、家にあったゴワゴワでダブダブのハッピ（法被）を、袖が会わないので、袖口を折りまげての衣装でとても動きにくかったのを覚えています。その後、衣装はTシャツ姿となり動きやすく現代風に少しずつ変化してきました。

町内の運動会。おより（現在では盆踊り）・県民会館で福井祭の中央公園で・酒生遺跡祭と参加する回数も増えて、おまけに少しずつ度胸がつき、いい気分に・・・・特に奈良県明日香村との交流会参加のときの感動は強く忘れられません。

でも私には何度やっても毎回失敗はありました。あるとき、コロコロと銭太鼓が手から離れてしまい、とても恥ずかしい思いでしたが「あいきょう、あいきょう」と拍手され会場の皆さんに励まされたことも思い出します。

そんな私たちもだんだん歳を重ねるにつれて、足が痛い、ひざや腰が痛い手が上げられん・・・・と参加意欲も減ってきました。少しずつ新しい方が参加されていますが、先輩としての思いは、昔の先輩と同じ思いがあるのに気づきました。荒木町の伝統ある「銭太鼓」は、婦人会が敬老会の出し物に参加するだけが目的ではないと思います。

お年よりも子供も男も女も・・・・町民全体で受継ぎ、「銭太鼓」大好きの人たちで保存されていくべきではないでしょうか。

何時の日か、子供も大人もお年よりも、一緒に打つ「銭太鼓」を楽しみに、夢見ています。

表彰式に参加して

荒木町　吉村栄美子

この度、荒木町婦人会　の「銭太鼓活動」に対しまして「福井市ふるさとづくり大会」に於いて市民運動優良団体として、福井市長より直々に表彰を受け荒木町婦人会の代表として大変に喜ばしく、また何十年の歴史ある活動を誇らしく感じました。

私もこの荒木町に嫁ぎ、姑から嫁へと築いてこられた歴史ある「銭太鼓」に、微力ながら参加させてもらい、地区の祭りや酒生地区の文化祭などで披露できたことを嬉しく光栄に思います。

荒木の住民として、この伝統ある「銭太鼓」活動を何時までも世代交代の交流を深めながら、引き継いで大事に伝統芸能として保存を願うものです。

最後になりますが、この貴重な表彰式に代表として参加する機会を与えて頂いた事を感謝します。

注　受賞　　平成二十年二月九日　…第七節　参照

晴れて　受賞！

平成１９年度　福井・高志地区
ふるさとづくり大会

（表彰内容）

荒木婦人会 代表　吉村　栄美子 （女３３名） （福井市）	毎週土曜日の夜、荒木町集落センターにて、昔から荒木町に伝わる伝統芸能である「銭太鼓」の練習を行い、地区の祭りや文化祭の席上にて披露している。特に、姑から嫁への継承がなされ、世代間の交流を図るとともに、伝統芸能の存続に熱心に取り組んでいる姿は、地区の子どもたちにとって模範となる。

表彰状
荒木町婦人会 殿
あなたは住みよいふるさとづくり運動の趣旨をよく理解され その実践活動を通じ地域の発展に大きく貢献されました ここに記念品を贈り表彰いたします
平成20年2月9日
住みよい福井高志地区協議会
会長 東村 新一

すでにご存じの事ではありますが、去る２月９日　福井・高志地区ふるさとづくり大会において、我が婦人会が市民運動優良団体として表彰されました。

昨年のいきいき文化祭での銭太鼓出演を通して、伝承への強い思いと団結力で地道に守り続けている銭太鼓を高く評価して頂けた事、会員みんなの喜びであり誇りに思っています。

昨年出演された皆様、本当にご苦労様でした。

この受賞を励みに伝統芸能である銭太鼓をこれからもずっとずっと継承していけますよう御協力よろしくお願いします。

2008年３月吉日　荒木婦人会 前 会長

銭太鼓（あゆみの会）の思い出　荒木町　松川圭子

荒木町の銭太鼓を「あゆみの会」メンバーが、先輩から教えてもらって始めたのは、酒生地区敬老会のアトラクションとして出演したのが始まりです。

もう三十五年ほど前になりますが、当時「あゆみの会」メンバーは保育園児を持つ母親であり何事にも活発で若い力があふれていたものです。しかし、一度も先輩の演技を見たことが無いという者も多く、銭太鼓・踊り・唄・締め太鼓それぞれの動作が先輩達のように近づくまでは大変でした。

その後、皆の努力で何年かの回数を重ねるうちに「荒木の銭太鼓を見ないと帰られんでの」という暖かい言葉をかけてもらったときのうれしさ、演技の最中にもらった大きな拍手と大きなかけ声の感激。今でもわたしの耳に残っております。

がんばりやの集まりであったメンバー達も年齢とともに身体のあちこちが思うように動かなくなり順々に若い人たちのバトンタッチとなっていきました。

私たち「あゆみの会」のメンバーにとって、敬老会や遺跡祭り、おより、荒木町運動会その他の場で発表してきた銭太鼓は、我が子の成長とともに頑張ってきた今では大切な思いでとなっています。

私と銭太鼓　荒木町　西村　滋子

私は結婚してから主人の転勤について行き神奈川県、大分県、石川県に住みましたが、平成２年に家庭の事情で福井の主人の実家で暮らすことになり荒木に帰って来ました。

嫁に来てからも実家には住んだことはなく、何となく不安で右も左も良くわからないような感じの時に「銭太鼓」に誘って頂きました。「銭太鼓」って何かなと思いましたが、同世代の町内のお嫁さん達と顔

見知りになれると思い、あまり深く考えないで参加しました。始めは皆さんの練習しているのを見ていたのですが、「踊り」か「太鼓」のどっちをやりますかと言われて何も考えずに「銭太鼓」にしました。後で聞いたのですが、私が習い始めた少し前の頃は最初踊りを覚えてから銭太鼓に進むという順番だったようです。私が銭太鼓やってみていつも思うことは一回一回がちょっとやそっとではうまくいかないなと思う事でした。でも私はあのいつまでも耳に残るトンコトン、トンコトン、トンコトンと言う哀愁を呼ぶお囃子の音がなぜか私を呼んでいるようで遠い懐かしい音、そして子供の頃の故郷の呼び声に聞こえて私に大丈夫だよ頑張れよと言ってくれているような気がしてならないのです。

第十一章　銭太鼓に関する資料と写真

夏祭り（酒生敬老会）のとき、銭太鼓の前口上です。

「これより演じます銭太鼓は昔荒木の在所に泊まった旅芸人さんより教わり御祝儀やお祭りの時にやられた芸だそうです。終戦後酒生地区の敬老会のアトラクションに何かと云うことになり婦人会の人が教わりました。

代々の婦人会の人に受継がれて今日でも荒木の銭太鼓と云われています。銭を入れた竹筒で床を叩いたり廻わしたりして民謡の安木節の調子を取るのです。皆一生懸命練習しておりますがときには竹筒が手から放れて行くことがありますがこれも御愛嬌の一つとしてご覧下されば幸いです。

ではこれより始めさせていただきます。

この原稿は　荒木町称仏寺　前坊守　清水英子さん「写真前列左から二番目」が酒生公民館主事に渡されたものです。

組合便りの言葉と写真

）

磯野しなさんは、若い頃宝塚少女歌劇におられたそうです。

表紙説明

荒木町の銭太鼓

（酒生地区）

銭太鼓はその昔、武士が出陣する時に、励ましの意味で踊っていたとか。荒木町銭太鼓のグループは、大正の終わりごろ、同町に平田さんという大変器用な方がおり、祝儀の席などで銭太鼓を披露し評判だった踊りを婦人たちが習い、今日まで伝え守っています。

年をとってくると、技をさばききれないこともあり、当時若妻会だった皆さんが先輩から譲り受けたのは七年ほど前。先輩の元宝塚出身である磯野しなさん(66)は、みんなの熱心な指導に当ってきた一人。「昔はかすりの着物を着て、見よう見まねで踊っていたのですが、みんなで振り付けなどを考え、ご覧のように衣装も小道具もそろい、さしずめ現代版と言いましょうか。立派な後継者もでき、一安心です。」とにこやかに語る磯野さんです。前のグループもすっかり止めた訳ではなく、若い方たちと一緒に踊りを続けており、メンバーは全部で十七人います。農閑期になると、同町の集落センターはにぎやかな太鼓やはやしの音が響きます。

みんな家族の理解もあり、とっても楽しいとか。婦人部の大会や敬老会などで大活躍の皆さん、これからも大勢の人に披露してほしいものです。

後継者ができて一安心と、磯野さん

前列向かって右から、青山和子さん(45)林範子さん(44)清水那加子さん(37)前田熙代さん(42)坂口紀久枝さん(39)宮浦実子さん(34)。後列右から、平田喜美恵さん(44)北出ひで子さん(39)強力節子さん(36)小林節子さん(41)樫川笑子さん(48)。

福井新聞　平成三十一年八月二八日付

荒木町

銭太鼓

硬貨を入れた竹筒をぼちぼち代わりに、床に打ち付けてリズムを刻む福井市荒木町の「銭太鼓」。そろいの法

田園に響く独特音色

年の福井復興博覧会を契機に婦人会が中心となって復活した。

一家総出で丸一日、農作業に励んだ時代に「娯楽が なく毎日、みんなが寺に集まって寝る間も惜しんで練習した」。吉村美津子さん（85）はモノクロ写真に目を

波鉢巻き姿で、歌詞に「荒木」の地名を盛り込んだ安来節に合わせ、華麗に踊るように伴奏、どじょうすくいや唐傘踊りが花を添える。

1923年、天皇即位の祝いの際に当時、足羽郡酒生村の荒木にいた旅芸人が伝えたとされる。いつしか集落の祝儀で披露されるようになり、脈々と受け継がれてきた。戦災や震災によって一時は途絶えたが、52

細めながら懐かしむ。「日が変わるまで踊り続けたほど、銭太鼓は楽しみの一つだった」

一糸乱れぬ振り付けで響かせる独特の音色。宮浦みさをさん（83）は「竹筒を回したり、胸の前で十文字にしたり、本当に難しかった」と振り返る。村で出し物を持ち寄る敬老会でも人気の演目だったが、しばらくは身に付き、今も「ジャラジャラ」と軽やかに鳴らしてみせる。

時代とともに披露する機会は減ったが、婦人会や自治会が協力して「細々とでも守り続ける」という決意で、若い世代への継承に努めている。苦しい時代の「心の支え」として、また祝いの芸能として根付いた伝統の音色とリズムは、次代にも響き続ける。

指　定　書

荒木町銭太鼓研究会

平成23年度「福井学」推進協力団体に指定する

期間は平成24年3月31日までとする

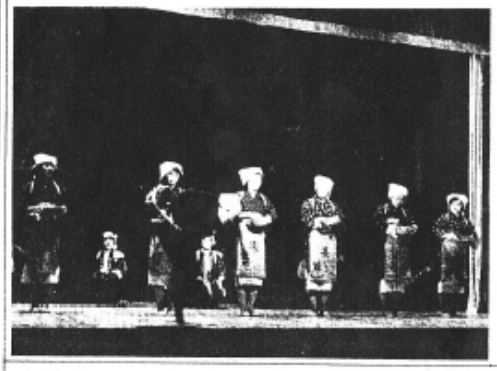
平成23年8月31日

福井市教育委員会

昭和50年7月27日発行　酒生むら

◇酒生青年会　県民会館ホール◇

銭太鼓・オン・ステージ



おらが酒生で
自慢なものは
良か衆 若か衆に
良か女子
ハイー ハイー

酒生むら

酒生青年会機関誌
発行 酒生公民館内
責任者：溜北文人
編集：石橋吉郎

去る昭和四十九年十一月二十四日、足羽連合青年団主催の文化祭が文殊小学校で開催され、酒生青年会員二十三名が賛助出演し荒木町に伝わる『銭太鼓』を披露。艶やかな黄と赤の祭り姿に身をまとい、酒生若衆が歌い踊る中、3人のチャリがドジョウをすくう。あわや舞台から転落か・・・の大熱演に、会場から思わず拍手が飛び初ステージを飾りました。

さらに二月十六日、福井県民会館大ホールでの「勤労青少年フェスティバル」に参加。同じメンバーで、舞台いっぱいに繰り広げられる銭太鼓のにぎやかな音は、ハヤシ太鼓にのせて その日のハイライトとなり、奥村大会長からも特にお誉めの言葉をいただき一同張り切り甲斐がありました。

この練習には、地元荒木の方々の熱心な御指導を受け、最初は不安でしたが、会員各位の練習と熱意が味を結んだ『銭太鼓オンステージ』でした。

敬
壽
老

敬
寿
老

酒生いきいき文化祭

10月10日
歓
明日香村
劇団
「時空」
迎

あとがき

これは平成二十一年から平成二十四年の三月までの記録です。たった八十年の経過でこれらの記録をとること難しいことを改めて実感しました。つたない文章と記録ですが、この研究を通して婦人部の皆さんがあらためて伝統芸能に関心を持っていただけたことを大変感謝しております。

今後なんとかして若い人たちに伝えたいと言って下さった人もおられます。これを機会にできるだけ力を注いでいかなければと思っております。

おわりにのぞみ、この研究に初めからずっと記録面で協力いただいた西村英治様、またはげまし編集の件で自宅を使わせていただき、多大の迷惑を快く許していただいた西村滋子様、聞き取りや会合と研究の会計を担当していただいた宮浦幸子様、酒生公民館館長並びに主事、さらに荒木町民に感謝し、お礼を申しあげます。

平成二十四年春

福井市荒木町
荒木銭太鼓研究会　代表　林　主計